

都市家族研究における新たなパースペクティヴ：
パーソナルネットワーク論からの再検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野沢, 慎司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008143

都市家族研究における新たなパースペクティブ

— パーソナルネットワーク論からの再検討 —

野 沢 慎 司

1. 課題の設定

現代を家族の変動の急激に進行する時代との認識に立ち、その方向を明確化することが家族研究者の最大の課題のひとつになってきている¹⁾。そのための試みのなかで、例えば家族の個人化(目黒, 1991)やライフスタイル化(正岡, 1988)といった把握の仕方が提案されてもきている。本稿の目的は、近年の都市パーソナルネットワーク研究の成果を援用しながら、とくに都市と家族の関連を再検討することによって、そうした家族変動に関する近年の議論に有効なひとつの研究視角を提示することにある。

すぐれて都市化が進行した現代社会における家族を、それを取り囲む社会的環境としての都市(あるいは一般的に地域社会)との関連から分析するという研究視角の重要性がとくに指摘されているが、この視角からなされる分析が現代家族の特徴的側面をどのように照射しうるのかという問いに十分な解答が与えられているとは言いがたい。このような指摘がなされた時点ですでに明言されていたことであるが、都市家族の研究が単に「都市における家族」に対象限定した研究の域を出ていない(清水, 1978, 1981)という状況がその後も持続していると見られる。その外部環境や資源との関連からの家族へのアプローチは、研究者の関心の焦点ともなっている現代家族の変動の要因やその方向性を考察するうえでもっとも重要な研究領域のひとつを構成する。しかし、その可能性を経験的なデータ分析による成果へと結実させていくためには、都市と家族を連結する理論的な視点と争点の整理および方法の検討が不可欠である。以下では、そうした経験的調査研究のための予備的な作業として、限定的にはあるが既存研究を批判的に概観して、研究視角の再構成を試みる。その際、都市と家族を媒介する重要な分析概念としてのパーソナルネットワーク(personal network)に着目し、その有効性を検討したい。

2. 現代都市家族の理論モデルの検討

近代化、産業化の進展とともに都市化の進行した現代社会において、家族がどのような特性を際立たせていくのかという問いは、社会学におけるもっとも基本的な主題のひとつとみなされてきたと言ってよいであろう。だが、特に現代のように家族の定義そのものが困難であり、伝統的な家族（それ自体必ずしも自明のものではないが）への類似性の程度としてしか家族が定義づけられない状況（Goode, 1982:9）を念頭におく場合、とりあえず家族に代表される第一次的集団（関係）が、現代社会の都市的経験によって一般的にどのような影響を受けるのかという文脈の中に位置づけてこの問題を整理する必要があるだろう。このような問題設定に対して与えられてきた解答は必ずしも整合的なものではなく、現在もお都市家族に関する対立したイメージと解釈が生産され続けている²⁾。そこで、これまでの代表的議論を概観し、そこに含まれる重要な論点を析出してみよう。

(1) アーバニズム論

まずこの問題への第一の解答は、都市的環境が個人の第一次的關係の形成に重要な影響を与えるという見解を理論的に整理した Wirth のアーバニズム論に見られる。人口の規模・密度・異質性の大きさから定義される都市がもたらす社会生活への影響を「生活様式としてのアーバニズム」と捉え、社会解体的な影響を強調した Wirth (1938=1978) は、都市的環境のインパクトの重要性を認める理論的見解の代表例であり、今なお都市生活の特徴づける一般化したイメージの源泉となっている。アーバニズム論は、都市は異質性の高い人口の集積によって社会成層や利害・関心集団の分化をもたらし、一方ではそれが地域的に凝離した「社会的宇宙のモザイク」を形成する側面を持つとし、もう一方では、近隣ならびに親族との紐帯や家族に見られた第一次的接触が衰退し、第二次的接触がそれに代替するという命題を導出する。移動性の高さを特徴とし、高度に分化・専門化した多種の集団に接触する都市生活は、単一の所属集団に包み込まれることはなく、また貨幣経済によるサービスや財の入手がパーソナルな関係への依存に取って代わることに着目し、インパーソナルで、皮相的、一時的、分節的な社会関係が支配的となると見なされた。また、家族はその特徴的な諸機能を様々な専門的制度にその場を奪われ、社会的意義を失ったと見る。

全体としては、(少なくとも伝統的な形での) 第一次集団は解体され、パー

ソナルな社会関係によって構成されるコミュニティ（地域的なものと家族・親族的なもの）が一元的に失われてゆく大衆社会論的な、原子化された個人イメージが帰結されることになる。その意味で Wirth のアーバニズム論に代表されるこうした見解は、パーソナルな社会関係の「一元的解体モデル」と呼ぶことができるだろう。

(2) 孤立した核家族論

都市がもたらす一元的な社会解体的過程を強調した Wirth のアーバニズム論に対して、都市的環境のインパクトそのものに注目したわけではないが、都市の中間階級を典型的なモデルとした Parsons (1956=1981) の「孤立した核家族論」は家族と外部社会に関するもうひとつの代表的見解となっている。構造機能主義に立脚し、近代化論の文脈から家族・親族の構造と機能を論じた彼は、現代社会においては、社会構造の分化の過程の中で親族単位がその重要性を減退させ、また核家族から他の社会機構へと様々な機能が移行されたが、家族は機能的により専門化した機関として安定し、その重要性を保っていると見た。家族の専門化した機能とは周知のように、子供の基礎的な社会化と成人のパーソナリティの安定化という「パーソナリティのための機能」であるとされた。

Parsons の「孤立した核家族」命題は、ロマンティック・ラヴに基づく結婚によって形成された夫婦家族（生殖家族）が主にその外に広がる親族（特に定位家族）との紐帯から急激に分離し、愛情に傾斜した連帯感の強いユニットを構成する (Parsons, 1954 [1943]) という主張を含んでおり、現代社会におけるパーソナルな関係が特殊専門化した形で、核家族の中に排他的に維持されているというイメージを提出した。彼の言う「孤立」が、居住と家計の単位としての核家族の構造的孤立であって、必ずしも機能的孤立を意味してはいない (山根・野々山, 1972) としても、生殖家族の中における夫と妻それぞれが支援を求めてよりかかっていってよい相手は成人の身内には自分の配偶者以外には誰もいない (Parsons, 1956=1981: 40) という含意を持っていたことから、小さな社会的ユニットとしての核家族の中にこそパーソナルな（支援的な）関係が安定的に見いだされるという現代家族モデルを導いたとみることができるだろう。そして、性別に基づく役割分化を前提とした孤立した核家族は、職業が誘発する地理的移動の容易さと、互いに対立する価値に立脚する職業構造（普遍主義、業績性）と親族構造（個別主義、生得性）の隔離という2つの局

面を主要な論拠として、産業化社会の中に適合的に位置づけられることになる。

(3)都市家族と第一次集団の再発見

アーバニズム論や孤立した核家族論は、その応答・反論として、1950年代から1960年代にかけて、一連の実証的研究を生み出した。産業化した都市社会をフィールドとしたそれらの諸研究が共通に明らかにしたことは、アーバニズム論が主張したような一元的な解体モデルは妥当せず、第一次の関係が大都市においてもなお人々の社会生活の中に重要な位置を占めているということであった。そして、都市における第一次集団の再発見と言われるひとつの潮流が形成され、1970年代には新たなオーソドクシーとなったと言える³⁾。

しかし、それらの研究が対象としたデータは、アーバニズム論の提示したモデルからは大きくずれた社会生活のイメージを描き出すだけでなく、社会階層(Axelrod, 1956=1978)、居住地域の特性(Greer, 1956)、あるいは特定の社会階層の集住によって特徴づけられる居住地域(Young & Willmott, 1957)などの変数が、無視できないほどの差異を人々の第一次集団への参与の程度にもたらすことを示した。こうした発見は、家族を含む第一次関係の様態への決定要因として、都市そのもののインパクトの重要性を否定し、何よりも居住地域の住民構成とその社会的特性に還元しようとする議論に発展することになった(Gans, 1962)。このように都市の第一次集団の再発見は、一元的社会解体モデルを修正するという意味を持ったが、一方では産業化された都市社会のもたらす影響、特に社会分化というマクロレベル(社会構造上)の変動とミクロレベルの社会生活の関連を問うという(Wirthが重視した)問題意識と方法的視座が失われることにもなったことには留意する必要がある(Wellman & Leighton, 1979; Fischer, 1984)。これら諸研究の意義は、都市化のインパクトが多様なものであり、少なくともすべての人間の社会生活に一元的な帰結をもたらすものではないということを明確に示した点にあったが、それが社会分化のミクロレベルへの影響という問題の解決を意味するわけではなかった。

一方、孤立した核家族論を主要な標的として反証を展開した研究の代表としては、Sussman(1959)とLitwak(1960)を挙げることができる。特に後者は、「孤立した核家族」モデルへの代替モデルを明示し、産業化した社会において機能的により適合的なのは、「修正拡大家族(modified extended family)」モデルであると主張した。そして、現実の家族関係もこのモデルに近似することを、都市の中間階級をサンプルとしたデータから示した。生産活動の単位で

あり、居住の単位でもある、権威関係の明確な古典的大家族との対比から導かれた孤立した核家族に対して、修正大家族モデルは、産業化の進んだ都市社会が備える条件のもとで、核家族が構造的に孤立しながらも、その外側にある親族との紐帯は援助的・社会的活動を共有することによってその重要性を維持し続けており、そしてそのことが核家族の社会への適応にとって、より機能的であることを強調する⁴⁾。

しかし、一見対立するように見える2つのモデルは、むしろ重要な前提を共有していることを見逃してはならない。両者は社会構造の分化を前提とした、社会移動の増大した産業化社会のインパクトを認めているという点で一致し、少なくとも居住（あるいは地理的移動）と家計のもっとも重要な単位としての核家族の広範な存在を前提としている。そのうえで、修正大家族モデルが実証的なレベルでなした貢献は、核家族という単位での生活が、社会分化によってもたらされた様々な官僚制組織から得られるサービスに依存するだけでは十分に機能し得ず、親族のみならず友人や近隣などの第一次的集団との援助的・社会的紐帯のマトリックスの中に織り込まれながら営まれていることを示し(Litwak & Szelenyi, 1969)、孤立した核家族モデルがやや暗示的に描いた援助的・情緒的関係の核家族内部完結的なイメージを大きく修正した点に認められる。

ただし、一方で社会階級や人種によって親族的紐帯の近接性や依存形態の差異が見いだされているものの(Sussman, 1959)、社会分化の影響は、主に産業化社会における核家族という単位の優勢および官僚的組織と第一次集団領域の分離（そして機能の分有）という一元的な帰結に見いだす傾向が前面に出ている。さきに触れた、都市が内包する第一次的関係の多様性を都市そのものの与える影響の文脈で扱う視点はやはり稀薄である。家族内部の構造に関しては特にParsonsの議論に検討を加えることなく、核家族モデルを前提とし、親族集団内における核家族ユニット間の援助と社交の機能的関係として再構成されたこのモデルは、産業化社会における機能的に適合的な家族形態を単一のモデルに求めようとする点で孤立した核家族論の修正版であり、その延長線上にあったと言えるだろう。それらの点に、このモデルの限界も存在すると考えられる⁵⁾。

(4)近代家族論と近代人のアイデンティティ論

欧米における歴史社会学の成果に依拠しながら展開される近年の「近代家族

論」は、家族観の歴史的な相対化という点にその貢献が認められるが（落合，1989；上野，1990），その中から浮かび上がってくる「近代家族」の諸特徴は、文脈を異にするとはいえ、ある面では前述の孤立した核家族モデルとの間に一定の近似性を呈しているように見える。例えば Shorter (1975=1987) は、近代以前の伝統社会において家族は親族と共同体の強力な紐帯の中に縛り付けられていたが、主に市場資本主義の台頭によって感情革命がもたらされたと言う。つまり、夫と妻を結びつけるロマンティック・ラヴや母子間の愛情が歴史的に生み出され、それらが共同体あるいはそのなかの仲間集団との絆に優先するようになった結果として、「プライバシーという盾」がもうけられ、「家族愛のシュルターの中で、近代核家族が誕生」した（1975=1987: 5）ことを歴史的資料によって論証しようとしている。

さらに、1960年代以降の欧米の社会学的調査研究をも検討の対象としたうえで Shorter は、社会階級による差異は認められるが、全般的には現代社会の核家族が友人や隣人とのつきあいを減退させ、直接の親族の相対的重要性を高めっていると評価する。しかし、現代における親族の機能は伝統社会における共同体の人間関係とは異質なものであり、「今日の親族は、夫婦家族の自己中心的な情緒構造を補強し、拡大するものであって、けっしてそれと敵対したり、それに破壊的脅威を与えるものではない。…現代社会の核家族が、物理的にも精神的にも、隔離された存在であることに変わりはない」（1975=1987: 257）と結論づけられる。修正拡大家族論などが第一次的集団の存続を再発見し、その重要性を強調したのに対して、歴史的な変化という観点から構成された近代家族モデルは、結果的に、個人が取り結ぶパーソナルで情緒的な関係が、外部からはかなり強固な壁によって隔てられた核家族の中に限定的に見いだされるという、孤立した核家族モデルに近似した家族像を導出したのである⁶⁾。

孤立した核家族論や近代家族論の主張との関連において重要なのは、Berger, Berger & Kellner (1973=1977) の「近代人のアイデンティティ論」である。Berger らは、近代社会の特殊性を、秩序立てられた現実、生きることに意味を与えてくれる現実としての社会的な生活世界の複数化の中に見いだしている。この複数化は基本的に私的領域と公的領域（生産活動と官僚機構組織の領域）の二分化に見られるが、これら二つの領域それぞれの内部でも起こっている。そして、そのことが近代人のアイデンティティに特異な性格と危機的状況をもたらすと論じられている⁷⁾。

本稿の問題設定との関連で重要なのは、第一に、こうした生活世界の複数化

が、都市生活と近代マス・コミュニケーションという経験との関連で論じられていることである。都市は「多種多様な人間や集団の出会いの場であり、したがって相異なる世界の出会いの場」である(1973=1977: 73)ことから、意識の都市化(社会的・生活世界の複数性の意識レベルでの受容)をもたらす。しかし、この意識の都市化は都市に居住する人口にのみ見られる現象ではなく、マス・コミュニケーションという近代的メディアによって、人々はどこにいても情報やコミュニケーションの複数性にさらされ、「安住の地の喪失(homelessness)」というアイデンティティの危機的状態を経験しているとされる。

第二に、こうした社会的・生活世界の複数化がもたらす状況への補償として、近代社会が用意した解決策は、公的領域からはるかに隔絶したセクター(私的領域)の形成であると彼らは見る。この私的領域のうちでもっとも重要な制度が家族である。しかし、家族をはじめとする私的領域は、その全体を組織化する制度を欠いており、人々が選択的に作るという性格を内在させている。それゆえに、新しい機能を与えられた家族や多様な自主的団体も「脆弱な構築物」であり、「私的領域の補償的性格はつねに危機状態にある」と診断されるのである(1973=1977: 215-218)⁸⁾。

(5)現代都市家族研究に残された課題

これまでの簡単な概観の中で触れた議論を整理するならば、以下のような要約が可能であろう。

近代化・産業化がもたらしたインパクトを、公的領域と私的領域の分離と見るという点で、Bergerらは近代家族論と共通した認識を示している。Parsonsの孤立した核家族論を含め、私的領域の中でも核家族が、情緒的・援助的関係のユニットとして卓越した位置を占め、パーソナリティやアイデンティティの安定⁹⁾のためのもっとも重要な拠点となっているというコンセンサスが得られる。さらに、都市家族と第一次的集団の再発見を導いた実証的諸研究の知見を考慮に入れる限り、アーバニズム論の主張した現代都市社会が第一次的関係の一元的な解体現象をもたらすという命題は、修正を余儀なくされる。

しかし、アーバニズム論が説明変数として重視した人口の変数によって規定される都市とその帰結としての社会分化のインパクトを追究するという説明図式は、こうした私的領域に構築される第一次的関係への影響とその評価に関する議論において未解決の問題領域を形成している。社会分化の程度の相対的高

さが、「社会的宇宙のモザイク」(Wirth)、あるいは「社会的な生活世界の複数性」(Berger *et al.*) の培養器としての性格を都市の世界に付与するとすれば、それが私的領域内の社会構成に与えるインパクトが重要な論点として浮かび上がってくるはずである。

現代都市社会における、家族外のパーソナルな関係(親族、近隣、友人など)がなお核家族の生活にとって重要性を維持し、それを包み込んでいるとするモデル(Litwak など)と、情緒的・援助的関係の核家族内限定形モデル(Parsons, Shorter)との対立は、①「何をいつするかという決定は核家族の責任」であるという意味で核家族の自律性を認めること、②第一次集団の中でも親族との紐帯が相対的にもっとも重要性を高めていること、③しかもその役割は「核家族との、強制的ではない支援的な関係」にあるとすることの3点においては(Sussman & Burchinal, 1962: 240)、少なくとも一応の収束を見せていると言ってよいだろう。しかし、主に社会分化の影響を公的領域(職業構造・官僚制機構)と私的領域(家族・親族構造など)の分離に見だし、両者の関連の検討から導かれるこの近代産業社会への一元的な適合モデルは、小集団としての核家族を前提としていることにより、家族生活の多様性を分析の射程から排除しているという重大な欠点を持っている。それゆえに、家族生活を営まないことを含む複数の生活様式を併存させている都市の現実(Gans, 1962)を捨象せざるをえない。家族生活の多様性あるいはライフスタイルの分化(それがどの程度のものかは別にして)を現代家族の研究の焦点として設定するならば、多様な社会的世界の多元的存在の器としての都市への着目は極めて重要である。親族は言うまでもなく、核家族を集団論的パラダイムで捉えることのこうした限界は、社会的な世界と家族への関わりの中で具体的アイデンティティを形成していく個人を中心に据えることで克服することが可能であると考えられる。残された問題は、主に核家族が前提となっている世帯の内部の特性と外部の社会関係の特性を、ともに変数として扱い、それぞれが都市の社会構造上の特性によってどのようなインパクトを受けるかを考察することにある。議論を先どりすれば、それは、個人を分析の単位とした、都市における家族と社会的な世界との交差への研究視角を要請することになる。

最後に、パーソナルな関係によって構成される私的領域を、本質的に不安定で脆弱なものとするモデル(Berger *et al.*)と、その安定性、社会との機能的適合性を強調するモデル(核家族に限定的なParsonsおよび非限定的なLitwakら)との対立は、必ずしも解消されていなかった。この問題に直接答

えることは本稿の目的の範囲を越えるが、やはり都市の社会分化の影響という文脈で、パーソナルな社会関係領域に一定の評価を加えることは重要な課題となる。ここでは、WirthとBergerらがともに社会的世界の複数性に都市のインパクトの重要性を見いだしながらも、多様な社会的世界への接触を論拠として、近代都市人がアノミックな状況に置かれる傾向のみを強調したことに注意を促したい。個々の社会的世界の生成や維持という側面を、実際にその過程に含まれる個人間の紐帯の形成・維持・変容という視点から捉えれば、たとえ多くの社会的世界の存在を認知していたとしても、単一の社会的世界への選択的コミットメントの結果として、むしろアイデンティティが生成・強化される側面を見いだすことも可能なはずである。そのような見方をひとつの焦点として、都市的環境と私的領域との関連を問い直す新たな研究の動向を次節で概観することにしよう。

3. 下位文化とパーソナルネットワークの培養器としての都市

都市が第一次の関係の組織化に与える影響を巡る問題は、Fischerの「下位文化理論 (subcultural theory)」の提唱によって新たな展開を見せた。下位文化理論は、都市が持つ大規模な人口という特性のもたらすインパクトに着目する視点を継承し、そのインパクトを多様なそして非通念的 (unconventional) な下位文化 (社会的世界) の生成・強化の側面と結びつける論理を精緻化した点に第一の貢献がある (Fischer, 1975=1983, 1982, 1984)。彼は、都市においても親密な関係が維持され、人々が私的な世界の中に住んでいるという前提に立ち、都市居住者が住む、意味を持った社会的世界 (環境) を、「特定の特性 (民族性や職業など) を共有し、互いに相互作用することが特に多いという傾向を持ち、相対的に際立った信念や行動を示す人々」によって構成される下位文化として捉えようとする (1984: 36)¹⁰⁾。そして、人口の「臨界量 (critical mass)」をひとつのキー概念として、下位文化の形成に都市が及ぼす影響を説明しようとする。つまり、下位文化をひとつの自立性を持った社会的世界として成立させるために最低必要な構成メンバーの数 (臨界量) の確保という観点から、都市居住がもたらす独自のインパクトを認めようとするのである。

都市の人口規模の大きさは、第一に、①誘引する移入者の人口量と多様性の増大 (選択的移住)、および ②職業、施設・機関、利益関心集団の専門分化と異質な近隣地区の形成 (構造分化) という、相互に関連し合った2つの過程を通して、多様な下位文化を創出する基盤を提供する。第二に、①こうして獲得

された一定数の人口を基盤とする下位文化は、共同行為の可能性や排他的な相互作用の傾向を高め、アイデンティティを強化する（臨界人口量確保による境界維持）、②異なった社会的世界に住む人間同士の接触の増大が、異質な世界に対する否定的反応と相互の軋轢を生み出し、自らの下位文化への一体化を強化する（集団間摩擦）、という2つの過程によって都市内部の個々の下位文化を強化する、と主張される。このように、Fischer は、人口規模によってもたらされる都市生活の特性を、血縁や地縁に基づくコミュニティの崩壊ではなく、何よりも多元的なコミュニティ（下位文化の多様性）の形成という側面に見出すという新たな視角を提供したと言える。

これまでの経験的データから得られた知見の整合的な説明をめざす方向で精緻化された下位文化理論は、都市人の住む、親密で援助的な関係によって構成される小世界としてのパーソナルコミュニティ（personal community）が、こうした都市的環境の特性によって、どのようなインパクトを受けるのか、という問題を設定する。それは、これまで特に親族、近隣などの伝統的な第一次的集団の、その集団性の変容の側面から追究されてきたコミュニティ問題に対して、個人を中心に据え（Wellman, 1979; Wellman & Leighton, 1979）、その個人が相互作用する個人の集合としてのパーソナルコミュニティの特徴と居住地コミュニティの特徴を関連づけるという視点の転換に立脚するものである。パーソナルコミュニティは、具体的には、何らかの基準で析出された、特定の個人の持つパーソナルな関係の集合体、すなわちパーソナルネットワークとして把握される。そして、そのネットワークの特性が、どのような要因によって規定され、個人の行動やパーソナリティにどのような影響を与えるかを焦点に据えた分析視角に結びつくことになる¹¹⁾。

伝統的な第一次的集団の視点から、個人のパーソナルネットワークの視点への転換は、親族や近隣などの伝統的集団の基盤であった血縁や地縁を、一定の制約のもとでの選択によってパーソナルな関係が形成される際の社会的文脈と見なすという重要な発想の転換を含んでいる。つまり、アーバンイズム論の主張が前提としていた、伝統的な第一次的集団としての親族や近隣の提供する第一次的な紐帯と、社会分化の過程で生み出される専門分化した職業集団や利害・関心集団の提供する第二次的な紐帯という相互排他的な二分法を排するのである。前述のように、Fischer は後者の諸集団を都市に生成する下位文化という概念に包摂しているが、この下位文化も親族や近隣と同様に、パーソナルな関係形成のための社会的文脈と見なしたうえで、実際に構成されるパーソナルネッ

トワークを検討の対象にしようとするのである。この理論から導かれる仮説は、都市的環境が下位文化を多様化させるとすれば、それはパーソナルな関係形成におけるプール（機会）の増大、すなわち選択肢の増大を帰結し、それゆえ都市人のパーソナルネットワークは、より選択的に構築されるようになる、というものである。

この仮説は、カリフォルニアの規模の異なる居住地コミュニティ間の比較調査研究によって検討を加えられた（Fischer, 1982）。そこでは、パーソナルネットワークは、教育、収入、ライフサイクル上の段階、ジェンダーなどの、機会への資源・制約条件を形作る社会的特性によって直接規定されるが、そうした要因をコントロールしても、都市的環境の間接的影響は主に以下の諸点に見られることが明らかにされている。

- ①少なくとも経済的・時間的資源を多く所有している層に限れば、都市は、もっとも選択的で任意性の高い友人という関係を増大させる。
- ②親族や近隣という伝統的と考えられる紐帯は、都市ではより選択的になる（家族・親族・近隣の友人化）が、特に危機時における親族の重要性は変わらない。
- ③都市は、パーソナルネットワークの地理的分散を促進する。
- ④都市人のパーソナルネットワークは、多数派に属する場合には異質性を高め、少数派に属する場合には同質性を高める。
- ⑤都市的環境は、状況的に提供される下位文化（職場、組合、教会のような制度化された社会的文脈）よりも、選択的な下位文化における社会的関わりを促進する。つまり、個人レベルでは、特に強い関心を持つ下位文化への関わりを強め、集団レベルでは、小規模の特殊な下位文化への関わりを特に促進する条件をもたらす。
- ⑥都市人の、自分のパーソナルな世界に含まれる人々（私的世界）への信頼感は、非都市的コミュニティの住民と変わらないが、見知らぬ人々（公的世界）への不信感は相対的に増大する¹⁹⁾。

これらの知見は、下位文化理論に修正を加えつつも、その基本的論理に一定の支持を与えている。知見の全体を通して、大都市がもたらすパーソナルコミュニティの特徴的差異はスタイルの差というべきもので、それが提供する援助性や親密性の質においては、小規模な居住コミュニティに住む人々のパーソナルコミュニティに劣ることはない、という結論が導かれる（Fischer, 1982: 260）。パーソナルネットワークの視点から都市人のパーソナルコミュニティを対象と

している最近の他の研究も、現代の都市生活者が形成する私的世界が、構造的に分化し、地理的に分散しながらも、状況適応的に維持されている様相を描き出している¹⁰⁾。Fischerの研究は、例えば Shorter や Berger らの、前近代／近代という区分を前提とした歴史的変動に関するモデルの反証そのものを意味しないが、社会変動過程における都市化の独自のインパクトを再評価するための重要な視座とデータを提供している (Fischer, 1977)。人口集中による社会分化の過程に再び注目することによって、都市は、社会解体やアノミーの場ではなく、多元的な下位文化の生成の場として、さらに分化した個人のアイデンティティを支える選択的なパーソナルネットワークの形成の場として、あらためて位置づけられつつあると言えよう。

4. 都市と家族とパーソナルネットワーク

Fischer の下位文化理論に基づく都市生活の再解釈は、前述の家族モデルの再検討を促す。都市人のパーソナルネットワークに関する一連の研究は、主に個人に焦点を合わせているため、その家族生活 (世帯内関係) は極めて周延的にしか位置づけられていない。個人の世帯外パーソナルネットワーク形態の説明要因として、ライフサイクル段階や家族内役割の相違との関連で取り上げられているが (Stueve & Gerson, 1977; Fischer, 1982; Wellman, 1985)、家族そのものが都市的環境によってどのような影響を受けるかという問題は焦点化されていない。しかし、パーソナルネットワークへの都市のインパクトは、それを媒介として家族生活のライフスタイルにも重要な偏差をもたらすと考えられる。

社会的ネットワークという概念を使用して家族を分析した古典的研究である Bott (1971 [1957]) の業績は、こうした文脈から再評価される価値がある。彼女は、ロンドンに居住する20の家族を対象としたインテシヴな面接調査を通して、夫婦の役割分離の程度が、家族の社会的ネットワークの結合度によって直接的に変化するという考察を導き、緊密なネットワークは分離的な夫婦役割関係をもたらし、ゆるやかなネットワークは合同的な夫婦役割関係をもたらすという魅力的な仮説を導いた。Bott の最大の貢献は、発見された家族のパリエーション (夫婦役割分業のタイプ) が、社会階級、ライフサイクルの段階、居住地域の特性、地理的移動などの要因と関連を示すことを認めながらも、例外的ケースが存在することや、それらの要因がどのようなメカニズムによって家族のタイプを規定するのが明らかにされなければならないことを重視し、

媒介変数として社会的ネットワーク概念を先駆的に使用して、家族と社会的環境を関連づける研究領域を開いた点にあるだろう。

Bott 仮説は、多くの後続研究を生み出すと同時に様々な批判にさらされた。なかでもネットワークの概念規定における多義性と家族役割分離度の一元的想定が、その後の仮説検証研究の知見間に見られる不整合をもたらしたという点では、見解の一致が見られつつある¹⁶。ネットワークの密度と同義に解される結合度のもたらす影響のみに注目し、規範的圧力の増大という観点から夫婦間の役割分離を説明しようとする Bott の論理 (1971: 60) の問題点として、ここでは特に以下の3点を指摘しておきたい。第一に、密度という測度自体が多義性を持った変数であり (Wellman, 1982: 69)、また密度そのものが親密性や援助性をもたらすかどうかは疑わしい (Fischer, 1982: 155-157) という意味で、Bott の仮説は大きな欠陥を内在させている。第二に、ネットワークが個人の行動にもたらす規範的圧力の内容は一義的ではなく、例えば性別役割分業を是認する規範という特定の規範の存在を考慮にいれなければ (Lee, 1979: 35)、影響の方向は定めがたい。つまり、ネットワークがどのような規範の内容を共有する下位文化 (あるいは社会的文脈) を背景として成立しているかを考察する必要がある。そして第三に、夫婦のそれぞれが持つネットワークが提供するものの性質とそれぞれのネットワークの重なり (network overlapping) が、少なくとも夫婦役割の分離度には深く関わっていると考えられることから (Harris, 1969=1977: 267-269)、夫婦それぞれのパーソナルネットワークを分析の単位とすべきである。

こうした問題点を含んではいるが、最後の2点に示したような修正を加える限り、Bott が切り開いた社会的ネットワークからの家族へのアプローチは、現代の家族の特徴を考察するための重要な準拠点をなすと考えられる。その基本的発想の背景には、個々の家族生活が多様であるにもかかわらず、それぞれのタイプに属する夫婦は、自らの家族生活の形態をそれを取り囲む社会的サークルの中では普通で典型的なものを見なしているという事実への着目があった (Bott, 1971: 52 f)。一方、家庭の部内者と部外者の境界線がかなり透過性を持つこと (Allan, 1989)、あるいは世帯外のパーソナルネットワークメンバーとの相互作用の多くが主に家庭の中で行われること (Wellman, Carrington & Hall, 1988) などの新たな指摘がなされている。家族内の関係のあり方や生活の様々な様式に関する共有された規範 (これを家族のライフスタイルと呼んでもよいだろう) は、世帯家族内で全く独立に形成されるわけではなく、他

のパーソナルネットワークメンバーにもある程度可視的であると考えられる。そして、その可視性こそが、あたりまえのものとして正当化された自らの家族生活のスタイルを支えているのである。これまでの議論との関連で言えば、既存の家族モデルの諸前提も、個々の家族が持つ多様性と家族のライフスタイルに影響を与えるパーソナルネットワークという視点から再検討される必要がある。言い換えれば、ネットワークと家族成員相互の関係を検討することによって始めて、モデルの妥当性を評価することも、修正することもできるのである。家族が示すライフスタイルを夫婦間の役割の分離の程度に限定せず、また Bott が役割分業に含めた様々な領域をライフスタイルの異なる次元として設定し直して、家族メンバーのパーソナルネットワークとの関連を追究すれば、Bott 仮説は、現代の家族生活の特徴を、多様性の文脈から、より明確に説明するための武器として再生する可能性を十分に秘めている¹⁰⁾。

パーソナルネットワークからの家族へのアプローチは、都市的環境を多様な下位文化の生成の場と捉える視点と結合することによって、現代都市家族の特徴をどう捉えるかという問題に重要な洞察を提供してくれるだろう。現代の家族は、選択されるという性格を強めているという主張を「家族のライフスタイル化」(正岡, 1988)と呼ぶならば、都市は家族のライフスタイル化を促進し、社会一般の通念から離れた家族生活(あるいは非家族生活)を育むという仮説が導かれる。むろん、都市という居住地特性そのものが、現代の特徴としてのライフスタイル分化をもたらすわけではない。技術革新の進展と普及や富裕化などの要因が、現代人の家族生活の選択可能性を増大させていると考えられる(Rubin, 1983)。しかし、都市が特に非通念的な規範をもつ少数派の下位文化の培養器であるとするならば、都市は常に新たなライフスタイル形成のフロンティアでもある¹⁰⁾。現代家族の特性をどこに求めようとも、その偏差の拡幅にこそ都市的環境の作用が見いだされると言えよう。そして、選択性の増大としてのライフスタイル化の過程とメカニズムを理解するためには、パーソナルネットワークを媒介として選択的に接触される下位文化の規範内容が、家族生活のライフスタイルに反映される過程を考察する必要があるだろう。なぜならば、ライフスタイルは、完全に個人に起因するものでも、経済・社会的位置のみによって決定されるのではなく(Zablocki & Kanter, 1976)、既に述べたようにパーソナルコミュニティの中で形成・維持されるからである。都市家族の研究は、多岐にわたる下位文化との接触を射程に含めることによって、その多様性を説明する重要な切り口を手に入れることになるだろう。

注意しなければならないのは、都市の下位文化の多様性は個人の選択可能性における多様性であって、必ずしも実際の下位文化へのコミットメントの多数性を意味しないということである。Fischer (1982, 1984) に依拠する限り、都市人の下位文化へのコミットメントは、その多数性にではなく、選択性と専門性によって特徴づけられると言える。つまり、都市人のアイデンティティは、複数の社会的世界間での分裂と全体性の危機という側面よりも、自らが望んでコミットする、より細分化し、専門化した下位文化の中で強化されるという側面を持つことに特徴があるという視点の浮上である。

都市がこうした傾向を促進するとするならば、それは「家族の個人化」(目黒, 1987, 1991) の主張と密接な関係を持っている。主に、性別役割分業に基づいていた男女関係が「経済依存性=性役割という基盤のない男女という個人間の関係をベースとしたタイプ」(目黒, 1991: 13) へ移行するという点に現代の家族変動の方向を読むとするこの議論は、主婦という家内の役割に特化していた女性のアイデンティティの構成が、家族役割とは別のアイデンティティへと比重を移しつつ自己形成する時代変化として、より包括的な文脈から捉えなおすことができるだろう。それは同時に、女性が家族役割と直接関連しない社会的世界(下位文化)への選択的コミットメントを増大させつつあるという過程でもある。こうした傾向は、まずライフサイクル上の変化や経済構造および全体社会レベルでのイデオロギーの変化などに直接の要因を求めることができる。そのうえで都市は、少なくともそれを望む個人にとっては、より特定化したアイデンティティ追求のための機会を豊富に用意する場として位置づけることができる。換言すれば、都市は、こうした特定のアイデンティティを支持する社会関係を、より選択的に形成することを促進する社会的文脈を増殖させている場なのである¹⁷⁾。

個人のアイデンティティの分化が促進されるという傾向は、何らかのかたちで家族内関係の再編をもたらす。都市家族が具現する先端的な特徴は、何よりもこうした選択的、専門的に形成された、個人にとって重要なアイデンティティを持つものとしての家族員間の相互作用の場となっているところに求められるだろう。パーソナルネットワーク研究の今後の課題は、ネットワーク特性とそれがもたらす一般的援助性や心理的満足感だけでなく、こうしたアイデンティティの分化を前提とし、特定のアイデンティティに支持や緊張をもたらすものとしてのネットワークという視角をその射程に取り込み、家族の内と外の関係に切り込んでいくことにあるだろう¹⁸⁾。

5. 結論

都市と家族の関連を求める研究領域にとって、これまでの家族モデルが現在もなお内在させている問題を析出し、それに対してパーソナルネットワーク概念を応用した研究から得られるいくつかの示唆と可能性を追究してきた。都市家族の社会的ネットワーク研究は、日本においても実証研究として実を結びつつあるが（野尻，1974；前田・目黒，1990など）、本格的展開は今後にまつところが大きい。しかし、必ずしも地縁的・血縁的關係との関連のみにとらわれず、都市家族を、特に選択的な関係形成とその社会的文脈としての下位文化との接触から把握し直そうとする視点は、この領域のひとつの重要な発展方向を指し示していると考えられる。そうした展開のためには、本稿の提示した研究視角が日本の社会・文化的状況においてどう位置づけられるかという問題、具体的作業仮説の設定と概念操作化の問題などが課題として残されている。都市のインパクトに焦点を合わせた家族研究は、そうした課題に応え、居住地域間比較の方法を織り込んだ調査デザインなどを使用した実証研究の成果を通して、現代家族理解に新たな光を投げかけることになるかと期待される。

註)

- 1) 家族社会学セミナー編『家族社会学研究』創刊号（1989）、第2号（1990）、第3号（1991）における特集のテーマ（それぞれ「転換期の社会と家族」「現代日本の家族変動」「いま家族に何が起きているか — 個人化と多様化への始動 —」）は、こうした状況を反映している。
- 2) 以下の議論は、Wellman（1979）によるコミュニティ論の整理とHutter（1988）による都市家族研究の整理を参考にしている。ただし、ここでは家族とそれ以外の社会関係との関連に着目して、議論を進めている。
- 3) これらの研究の適切な要約については、Sussman & Burchinal（1962）を参照。特に都市社会学の観点からの要約については、Greer（1962=1970）も参照。
- 4) 修正大家族モデルによって示される親族との紐帯が、古典的大家族と異なる点は、(1)地理的近接性を要求しない、(2)職業上の縁故主義を要求しない、(3)職業上の統合を要求しない、(4)権威関係がなく、平等主義的である、という4点に求められるとされる。このような特徴を備えるかぎりにおいて、またコミュニケーション・交通システムや貨幣経済の発達という条件を前提として、地理的に離れた核家族外の親族との紐帯は職業的誘引による地理的移動を促進すると主張される（Litwak，1960；Sussman & Burchinal，1962）。

- 5) Litwak らの批判は必ずしも理論的的を射たものではないとして、Parsons を擁護する見解もある (Harris, 1969=1977; 山根・野々山, 1972)。しかし、「核家族が基本的に独立した経済的単位として特徴づけられる」ことを前提にしてもなお、「関係し合う家族間の経済的相互依存の程度は、記述的関心を越えた変数である」(Lee, 1979: 49) とする立場に立てば、修正拡大家族論には一定の貢献と限界を見ることができる。なお、Allan (1985) は、次の二つの点から修正拡大家族論に批判を加えている。(1)実際に核家族を越えて活用される援助的活動はその大部分が第一次親族(親子・きょうだい)の範囲に限られることから、むしろ「修正基本家族(modified elementary family)」と呼んだほうが精確であること。(2)Litwak は、システムティックで規則的なサービスのみを提供する官僚的・公的な組織と不規則で個別特殊的なニーズに対応できる第一次的集団を区別して後者の重要性を強調したが、家族内における夫婦間の責任の分化への着目がなく、家内のサービスの専門的提供者が妻・母親であることを十分に強調しなかったこと。確かに、これらの点は修正拡大家族論の限界を示しているが、物質的・情緒的援助関係の形成の範囲と、家族内における分業の形態、のそれぞれ、および特に両者の関連が、検討されるべき重要な問題領域を形成していると捉えるのが本稿の立場である。
- 6) 落合は、家族史研究を概観したうえで、歴史的な産物としての「近代家族」の理念型としての特徴を次の8点に求めている。(1)家内領域と公共領域の分離、(2)家族成員相互の強い情緒的関係、(3)子供中心主義、(4)男は公共領域・女は家内領域という性別分業、(5)家族の集団性の強化、(6)社交性の衰退、(7)非親族の排除、(8)核家族(落合, 1989: 18)。これらの各点は、Parsons の孤立した核家族論における議論と矛盾しないばかりか、むしろ家族モデルとしては大きな類似性を示している。ただし、歴史社会的な研究による貢献は、家族の構造における歴史的変化(居住と生計の単位としての核家族の出現)と産業化の過程を結びつけるこれまでの社会学上の前提を無効とした点、そして産業化以前から存在した核家族の別の側面(例えば家族の情緒性や家族外領域との関わり)の歴史的変化に着目することによって、近代家族の形成を捉えようとした点にその独自性があることは強調されなければならない(Hutter, 1988: 88)。
- 7) 社会的な生活世界の複数性をもたらす近代人のアイデンティティの特異性は、(1)未確定性、(2)細分性、(3)自己詮索性、(4)個人中心性の4点に求められている(Berger *et al.*, 1973=1977: 85-89)。
- 8) Berger らの所論を私化論の文脈から整理したものとしては、片桐(1991)第7章を参照。

- 9) 結婚がアイデンティティの安定をもたらす点を特に強調した議論としては、Berger & Kellner (1964) を参照。なお面接調査データの分析に基づくそれへの批判的検討としては、Askham (1984) を参照。
- 10) Fischer は別のところで、次のような特徴を持つ数千人以上の大規模な人口群として、下位文化をより詳細に定義づけている。(1)共通の、際だった特性(民族性、宗教、職業、ライフサイクル上の段階、趣味、障害、性的嗜好、イデオロギーなど)を共有する、(2)共通の特性を持つ相手と接触する傾向がある、(3)一般社会のそれとは異なる一群の価値や規範を保持する、(4)自らの特性と同一の特性を持つ施設・機関(クラブ、新聞、店舗など)を後援・愛顧する、(5)共通の生活様式を持つ。さらに、メンバーと非メンバーの境界の厳密性、文化的特性における一般社会との乖離の程度の点で様々なレベルを示す下位文化がそこに含まれ、下位文化への個人の巻き込まれ方の程度にも多様性があるとしている(Fischer, 1982: 195 f)。その意味では、Fischer の言う下位文化は、Shibutani が、地域的領域基盤をもたないコミュニティとしての側面を持つとした、現代大衆社会における多様な社会的世界(演劇、巨大金融機関、女性ファッション、自動車レース・ファン、麻薬常習者、中古者ディーラーなどの世界)を包摂した概念である(Shibutani, 1986: 109)。Berger らの言う社会的な生活世界は、むしろ後述のパーソナルコミュニティの概念に重なる部分が多い。
- 11) このようなパーソナルネットワーク概念の有効性を主張する研究としては、Wellman (1982)、目黒 (1988)、Cochran (1990)などを参照。なお、Milardo (1988)は、ネットワークメンバー析出の方法の違いから、(1)親密な接触者のネットワーク、(2)交換ネットワーク、(3)相互作用ネットワーク、の3種類を区別し、それぞれの利点と欠点を検討している。Fischer (1982)は、(2)と(3)を組み合わせて、パーソナルネットワークを構成している。
- 12) この点に関しては、Fischer (1981)も参照。
- 13) Wellman, Carrington & Hall (1988)、Wellman (1990)などを参照。なお、日本においても、下位文化理論の可能性の検討やパーソナルネットワーク概念の適用の試みが行われつつある。例えば、松本 (1990)、Matsumoto (1991)、大谷 (1990)。
- 14) Bott 仮説の追試研究のレビューとその批判的検討に関しては、Harris (1969=1977)、Oakley (1974=1980)、Lee (1979)、上子 (1979)、藤崎 (1981)、目黒 (1988)などを参照。
- 15) Bott 仮説は基本的にネットワーク変数から家族内関係変数を説明するという前提に

立っていたが、家族変数が家族成員のネットワークを規定するという方向からのアプローチの持つ可能性も大きい。例えば、Oliveri & Reiss (1981), Reiss & Oliveri(1983) は、家族を取り巻く社会的環境がどのようなものであるかということに関して家族成員が共有している一群の前提を「家族パラダイム」と呼び、その違いから家族成員の親族ネットワークへの包摂のされ方の差異を説明している。彼らは、Bott のように家事や余暇の領域における役割分離ではなく、「家族パラダイム」概念に含意されるような家族成員間の価値観や信念の根本的共有の程度を取り上げ、それが高い家族は緊密な親族ネットワークに取り囲まれる傾向があることを見いだした。これは、Bott 仮説に反するが、むしろ家族のそうした側面を掘り出していないことが、Bott 仮説追試諸研究の結論に非一貫性をもたす要因になったと主張されている (Oliveri & Reiss, 1981: 405)。

- 16) 家族のライフスタイル化ということに関しては、都市において、多様な下位文化の成立を支えるとされた多様な施設や機関の提供するサービスの重要性も見逃せない。都市は、多様なライフスタイルの選択可能性を奨励する多様な専門的サービスへのアクセシビリティの高い環境と言えるだろう (倉沢, 1989; 松本, 1990)。
- 17) 下位文化理論の前提は、都市はそれが生成を促進する下位文化の多様性を規定すると見るが、その規範内容を規定するとは見ない、という点に注意が必要である。その意味で、都市が促進する家族の個人化の傾向は、理論的には、脱主婦化の方向のみならず、アイデンティティの家内領域への専門化と、そうしたアイデンティティに基づく選択的な関係形成 (下位文化へのコミットメント) の方向にも見いだせるはずである。なお、現代日本の女性の社会関係形成を、アイデンティティの多様化や選択性との関連から論じたものとしては、上野 (1987), 野沢 (1990) を参照。
- 18) このような分析には、顕著性ヒエラルキーを持つ複数の役割アイデンティティからなる自己という概念に立脚し、それと社会関係上のコミットメントとの関連を論じる相互作用論的アプローチの適用が有効であろう (McCall & Simmons, 1978; Stryker, 1968)。なお、そうしたアプローチを使用した、事例分析としては、野沢 (1988) を参照。

文 献

- Allan, G., 1985, *Family Life*, Oxford: Basil Blackwell.
———, 1989, "Insiders and outsiders," in G. Allan and G. Crow (eds.),

- Home and Family*, London: MacMillan, 141-158.
- Askham, J., 1984, *Identity and Stability in Marriage*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Axelrod, M., 1956, "Urban structure and social participation," *American Sociological Review*, 21, 14-18. (鈴木広訳, 1978, 「都市構造と集団参加」鈴木広編『都市化の社会学 [増補]』, 誠信書房, 211-221.)
- Berger, P., Berger, B. and Kellner, H., 1973, *The Homeless Mind*, Harmondsworth: Penguin Books. (高山真知子ほか訳, 1977, 『故郷喪失者たち』, 新曜社)
- Berger, P. and Kellner, H., 1964, "Marriage and the construction of reality," *Diogenes*, 46, 1-24.
- Bott, E., 1971 [1957], *Family and Social Network*, second ed., London: Tavistock.
- Cochran, M., 1990, "Personal networks in the ecology of human development," in M. Cochran *et al.*, *Extending Families*, Cambridge: Cambridge University Press, 3-33.
- Fischer, C.S., 1975, "Toward a subcultural theory of urbanism," *American Journal of Sociology*, 80, 1319-1341. (奥田道大ほか訳, 1983, 「アーバニズムの下位文化理論に向けて」, 奥田ほか編訳『都市の理論のため』, 多賀出版, 50-94.)
- , 1977, "Comments on the history and study of 'community'," in C.S. Fischer *et al.*, *Networks and Places*, New York: The Free Press, 189-204.
- , 1981, "The public and private worlds of city life," *American Sociological Review*, 46, 306-316.
- , 1982, *To Dwell among Friends*, Chicago: University of Chicago Press.
- , 1984, *The Urban Experience*, second ed., New York: Harcourt Brace Jovanovich.
- 藤崎宏子, 1981, 「仮説検証型実証研究の再検討」, 『社会学論考』, 2, 45-70.
- Gans, H., 1962, "Urbanism and suburbanism as ways of life," in A.M. Rose (ed.), *Human Behavior and Social Processes*, Boston: Houghton Mifflin.

- Goode, W.J., 1982, *The Family*, second ed., New Jersey: Prentice-Hall.
- Greer, S., 1956, "Urbanism reconsidered," *American Sociological Review*, 21, 19-25.
- , 1962, *The Emerging City*, Glencoe: The Free Press. (奥田道大・大坪省三訳, 1970, 『現代都市の危機と創造』, 鹿島出版)
- Harris, C.C., 1969, *The Family*, New York: Praeger. (正岡寛司・藤見純子訳, 1977, 『家族動態の理論』, 未来社)
- Hutter, M., 1988, *The Changing Family*, second ed., New York: Macmillan.
- 上子武次, 1979, 『家族役割の研究』, ミネルヴァ書房.
- 片桐雅隆, 1991, 『変容する日常世界』, 世界思想社.
- 倉沢進, 1989, 「都市的生活様式論序説」, 鈴木広ほか編『都市化の社会学理論』, ミネルヴァ書房, 293-308.
- Lee, G.R., 1979, "Effects of social networks on the family," in W.R. Burrell et al. (eds.), *Contemporary Theories about the Family*, I, New York: The Free Press, 27-56.
- Litwak, E., 1960, "Geographical mobility and extended family cohesion," *American Sociological Review*, 25, 385-394.
- Litwak, E. and Szelenyi, I., 1969, "Primary group structures and their functions," *American Sociological Review*, 34, 465-481.
- McCall, G.J. and Simmons, J.L., 1978, *Identities and Interactions*, revised ed., New York: The Free Press.
- 前田信彦・目黒依子, 1991, 「都市家族のソーシャル・ネットワーク・パターン」, 『家族社会学研究』, 2, 81-93.
- 正岡寛司, 1988, 「家族のライフスタイル化」, 正岡寛司・望月嵩編『現代家族論』, 有斐閣, 55-73.
- 松本康, 1990, 「新しいアーバンイズム論の可能性」, 『名古屋大学社会学論集』, 11, 77-106.
- Matsumoto, Y., 1991, "Social network perspective in urban sociology," paper presented at the joint seminar of CUHK and Japan Association for Urban Sociology in Hong Kong.
- 目黒依子, 1987, 『個人化する家族』, 勁草書房.
- , 1988, 「家族と社会的ネットワーク」, 正岡寛司・望月嵩編『現代家族論』, 有斐閣, 191-218.

- , 1991, 「家族の個人化」, 『家族社会学研究』, 3, 8-15.
- Milardo, R.M., 1988, "Families and social networks," in R.M. Milardo (ed.), *Families and Social Networks*, Newbury Park: Sage, 13-47.
- 野尻 (目黒) 依子, 1974, 「現代家族の社会的ネットワーク」, 『社会学評論』, 25, 37-48.
- 野沢慎司, 1988, 「主婦の社会参加を巡る夫婦関係・友人関係」, 『社会学論考』, 9, 23-48.
- , 1990, 「団地社会と下位文化」, 倉沢進編『大都市の共同生活』, 日本評論社, 131-164.
- Oakley, A., 1974, *The Sociology of Housework*, London: Martin Robertson.
(佐藤和枝・渡辺潤訳, 1980, 『家事の社会学』, 松籟社)
- 落合恵美子, 1989, 『近代家族とフェミニズム』, 勁草書房.
- 大谷信介, 1990, 「現代都市住民のパーソナルネットワーク」, 『松山大学論集』, 1, 69-86.
- Oliveri, M.E. and Reiss, D., 1981, "The structure of families' ties to their kin," *Journal of Marriage and the Family*, 43, 391-407.
- Parsons, T., 1954 [1943], "The kinship system of the contemporary United States," in T. Parsons, *Essays in Sociological Theory*, revised ed., Glencoe: The Free Press, 177-196.
- , 1956, "The American family," in T. Parsons and R.F. Bales (eds.) *Family: Socialization and Interaction Process*, London: Routledge and Kegan Paul, 3-33. (橋爪貞雄ほか訳, 1981, 「アメリカの家族」, 『家族』, 黎明書房, 16-59.)
- Reiss, D. and Oliveri, M.E., 1983, "The family's construction of social reality and its ties to its kin network," *Journal of Marriage and the Family*, 45, 81-91.
- Rubin, R.H., 1983, "Families and alternative lifestyles in an age of technological revolution," in E.D. Macklin and R.H. Rubin (eds.), *Contemporary Families and Alternative Lifestyles*, Beverly Hills: Sage, 400-409.
- Shibutani, T., 1986, *Social Processes*, Berkeley: University of California Press.
- 清水新二, 1978, 「社会過程論からみた『家族と地域社会』研究」, 『社会学評

- 論』, 28, 60-67.
- , 1981, 「都市家族の研究動向と問題点」, 篠原武夫・土田英雄編『地域社会と家族』, 培風館, 14-27.
- Shorter, E., 1975, *The Making of the Modern Family*, New York: Basic books. (田中俊宏ほか訳, 1987, 『近代家族の形成』, 昭和堂)
- Stryker, S., 1968, "Identity salience and role performance," *Journal of Marriage and the Family*, 30, 558-564.
- Stueve, C.A. and Gerson, K., 1977, "Personal relations across the life-cycle," in C.S. Fischer *et al.*, *Networks and Places*, New York: The Free Press, 79-98.
- Sussman, M.B., 1959, "The isolated nuclear family," *Social Problems*, 6, 333-339.
- Sussman, M.B. and Burchinal, L., 1962, "Kin family network," *Marriage and Family Living*, 24, 231-240.
- 上野千鶴子, 1987, 「選べる縁・選べない縁」, 栗田靖之編『日本人の人間関係』, ドメス出版, 226-243.
- 上野加代子, 1990, 「新しい家族の価値の模索」, 片山義弘編『家族崩壊』, 同朋舎, 101-132.
- Wellman, B., 1979, "The community question," *American Journal of Sociology*, 84, 1201-1231.
- , 1982, "Studying personal communities," in P. Marsden and N. Lin (eds.), *Social Structure and Network Analysis*, Beverly Hills: Sage, 61-80.
- , 1985, "Domestic work, paid work and network," in S. Duck and D. Perlman (eds.), *Understanding Personal Relationships*, London: Sage, 159-191.
- , 1990, "The place of kinfolk in personal community networks," *Marriage and Family Review*, 15, 195-228.
- Wellman, B., Carrington, P. and Hall, A., 1988, "Networks as personal communities," in B. Wellman and S. Berkowitz (eds.), *Social Structures*, Cambridge: Cambridge University Press, 130-184.
- Wellman, B. and Leighton, B., 1979, "Networks, neighborhoods, and communities", *Urban Affairs Quarterly*, 14, 363-390.

- Wirth,L., 1938, "Urbanism as a way of life," *American Journal of Sociology*, 44, 1-24. (高橋勇悦訳, 1978「生活様式としてのアーバンイズム」, 鈴木広編『都市化の社会学 [増補]』, 誠信書房, 127-147.)
- 山根常男・野々山久也, 1972, 「日本における核家族の孤立化と親族組織」, 山根常男『家族の論理』, 垣内出版, 265-307)
- Young,M. and Willmott,P., 1957, *Family and Kinship in East London*, Baltimore: Penguin.
- Zablocki,B.D. and Kanter,R.M., 1976, "The differentiation of life-styles," *Annual Review of Sociology*, 2, 269-298.